

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	小詩會：文苑
Author(s)	桔梗；蘆笛；白月；花柴；不割石；露草
Citation	龍南會雜誌， 1 1 9： 5 5 - 5 6
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6012
Right	

仰げば漏るゝ星屑や
闇に絶わざる水の歌

あふその光りその響
こころみ難し解き難し

小 詩 會

○ 南の海浮藻の下に珊瑚とる雄々しき人を戀ふる目もあり

桔 梗

○ 君待つ夜絃をはなれて白梅の香りと消わし琴のそら鳴
蘆 笛

小走りに袂はらく京染の暖簾にきわし春ともしころ

白 月

○ 君が賜ひし歌のかへしはさりながらかき聞わじ唯胸に秘めむ
夏かくす京友禪の振袖や酒のこぼれに幾年しみき

花 柴

○ 一つ家はいと花やかに夕日しの柑子色づく畑の中に
白雲の流るゝ空ま故郷と小手かざし見る旅の夕ぐれ
小羊はみな若草の香に酔ぬ眞晝を戀の牧守が歌

不 割 石

まぼろしに似しと計りの日記ゆるに忘れ難き人を泣き居ぬ
磐村や下の濁世の戀もなき國裂き根裂く斧ときく歌
三重の紐緋の香さゆらぐ銀燭に小兎つなぐ圓柱かな
み光のひろごり敷きて戀の世とならば秘めすて叫ばん歌よ
白梅に瑠璃の花空とき空をあふぎさうぞく伊勢道者かな
北山に好事召します使者の役浪速に下る晝霞かな
花咲けば散れば宴の立樂に拍子興がる青海波かな

露
草

海しらぬ乙女なつかし蕪煮ると曉起の灯を消してける
二十重なる青葉の底に新らしき國見出でける小佛越ねて
三尺は菖蒲に重き紅絹の袖背向の君よ舟棹し給へ
石打てば木魂や誘ふ古潭に沈黙かへり來太古の様に
古希臘のよき夢見ると陶物の壺だきてぬる若き友かな
紀の國に入る日は知らず茅渚の海や人美しくしき國思ふかな
ゆきづりに杖して來しをわん母と見し旅心夕霧の街